

第1ユニット報告(2)

近代日本哲学を問い直す

岩井 昌悟

東洋大学国際哲学研究センター第1ユニットでこれまでに行われた近代日本哲学関係のイベントを振り返れば(一部井上円了に関わる研究も含む)大きく分けて、

1. 近代日本哲学
2. 近代日本における中国哲学
3. 近代日本における仏教哲学

という三つの方向に分かれていたかと思われる。

1. 近代日本哲学

まず近代日本哲学を主要テーマとする研究では、井上哲次郎(相楽勉研究会等)、中江兆民(吉田公平 WEB 講演会等)といった明治期の哲学者や西田哲学(ワークショップ等)を取り扱うものがあった。

それらにおける主な論点は以下のものである。

- (1) 西洋哲学はいかに受容されたか?
- (2) 西洋哲学の用語はいかに日本語に翻訳されたのか?
- (3) 西洋哲学を受容しながら、いかに日本の哲学が形成されたのか?

以下に個々に概観する。

(1) 西洋哲学はいかに受容されたのか?

2012年7月27日に東洋大学教授・当センター研究員の相楽勉氏が発表された「哲学導入期の「実在」問題」と題された研究会では、西周以来に日本に導入された「哲学」がその当初いかなる知的探究として理解されていたかということを探る第一歩として、「実在」(Reality)概念に関する井上哲次郎の思考を辿った。「実在」は西洋哲学の根本問題であり、それがいかに把握されたかという点に「日本哲学」の出発点が示されていると考えられるためである。哲次郎が教鞭をとった東京大学文学部哲学科に学んだ最初期の哲学徒である井上円了、三宅雪嶺(本名: 雄二郎)、清沢満之、さらには西田幾多郎にまで影響を与えた哲次郎の「現象即実在論」の方法的核を取り出すことが試みられた。

(2) 西洋哲学の用語はいかに日本語に翻訳されたのか?

哲学用語の日本語への翻訳の問題を扱ったのは、2013年9月14日ジョン・マラルド氏(北フロリダ大学名誉教授)の“The Meiji Introduction of Philosophy to Japan as the Learning of a Foreign Language”(外国語の習得としての明治時代における日本への哲学の導入)であった。明治時代の日本語には、西洋哲学の様々な概念に対応する用語がなかったために、西洋哲学を日本語で受容するためには、造語したり、古い漢籍の言葉に新しい意味を付与したりする必要があった。このような明治期の哲学者たちの苦闘を見ていくために、マラルド氏は‘idealism’、‘subject’、‘individual’といった語について具体的に論じ、それらの語が日本語に様々な仕方でも翻訳され、その訳語が定着していくまでの過程を明らかにした。また、哲学という学問のスタイル自身が定着する過程、現在定着している「観念論」、「主観」、「個人」といった日本語が、明治時代にどれほど新奇なものであり、当時の人々をどれほ

どまごつかせたのかといったことを論じ、明治時代の哲学導入に際しての固有の問題を明らかにする発表であった。

(3) 西洋哲学を受容しながら、いかに日本の哲学が形成されたのか？

この問題は2012年12月7日の関西大学文学部教授の井上克人氏の「明治の哲学界：有機体の哲学とその系譜」において扱われた。井上哲次郎、井上円了、三宅雪嶺らは、西欧の哲学思想を受容していく中で、次第に自分たちが伝統的に継承してきた東アジアの思想が西洋哲学と比較しても決して遜色のないものであるばかりか、十分に形而上学的思考といえるものであることを確信するにいたる。それは一言で言えば「本体的一元論」の思考様式であって、現象の根底に「真如」もしくは「実在」と呼ばれる超越的絶対者を認め、しかもそれは現象の背後にあるものではなく、現象の只中に内在していて、現象は真実在の顕現にほかならないとする「現象即実在論」の考えであった。したがって、超越といっても、外に超越者を想定しない〈内在的超越〉の思考様式であり、この東洋的一元論を世界に提示することで、彼らは二元論的な西洋哲学的思考に対抗しようとしたのである。

2. 近代日本における中国哲学

また、中国哲学を主要テーマとした研究では、主な論点として以下が論じられた。

- (1) 近世日本において、中国哲学がどのように日本に受け入れられ、土着化していったのか？
- (2) 中国哲学は近代日本にどれほどの影響を与えたか？

以下に個々に概観する。

(1) 近世日本において、中国哲学がどのように日本に受け入れられ、土着化していったのか？

2012年9月13日の中華人民共和国・復旦大学教授にして当センター客員研究員の呉震氏の「近世日本における中国善書の流传およびその影響：中江藤樹の宗教観を中心に」と題した発表では、「近江聖人」と称された中江藤樹の『鑑草』が、日本善書史上、最初のものであり、江戸思想史上に顕著な足跡を残したものとして紹介された。中江藤樹は、明末の思想家である顔茂猷の『迪吉録』を重んじ、『鑑草』全61条の勸戒条例のうち、その48条をこの『迪吉録』から採録した。呉氏は、『鑑草』を『迪吉録』の節録として紹介し、その受容の特徴を分析した上で、その後の江戸思想史上に見られる『迪吉録』の影響について論じた。呉氏は、中江藤樹の宗教観には、明らかに中国的要素が見られるが、さらに日本の神道思想の要素も見られ、つまり中江は、中国の宗教観念を日本の神道思想として読み直して受容する思想的傾向があったと指摘した。呉氏はこの現象を「本土化」あるいは「現地化」、つまり「日本化」として紹介され、中江の外来宗教の摂取の仕方を、その典型例として位置付けた上で、かかる「日本化」が、中江藤樹以降の勸善思想家たちにも見られることを実証的に論じた。

(2) 中国哲学は近代日本にどれほどの影響を与えたか？

2011年12月21日の東洋大学教授・センター研究員（当時）（現在、東洋大学名誉教授・当センター客員研究員）の吉田公平氏の「東敬治と井上円了」と題した発表がそれに関わるものであった。吉田氏は儒学の系譜から明治期の思想を見ていくことの重要性を指摘した。明治期に活躍した思想家は、江戸時代末期に生まれた者たちであり、当時仏教思想が低調だったこともあり、彼らの思想的バックボーンは儒学にあった。それゆえ明治期の思想・哲学を理解するためには、儒学の影響を見過ごしてはならない。儒学が西洋思想の受容に果たした役割も大きい。儒学がキリスト教を説明する言葉を提供したという事実のほかに、三島中洲がJ.S.ミルの功利主義を義利合一説の立場から受け入れたことから、西洋思想の受容に儒学が果たした役割の大きさを窺い知ることができる。また、西洋の言葉の翻訳語として日本で作られた和製漢語がそのまま中国で受け入れられるなど、国際的なつながりといった面も無視できない。西洋から輸入されて突然日本で哲学が始まったわけではない。しかし同時に、例えば西田幾多郎の哲学の根本テーマが「実在」であったことから分かるように、仏教や儒学では中心的に扱われなかったテーマが、西洋哲学の受容によって浮上してきたという事実も認めなければならない。伝統からの連続性と、伝統との断絶、その両者に目配せをしながら明治期の哲学を扱うことが求められる。

3. 近代日本における仏教哲学

最後に仏教哲学に関する研究の主な論点は以下のものであった。

- (1) 近世の日本仏教は国際的な影響関係（キリスト教や中国仏教など）の中でどのように思想を形成していったのか？
- (2) 近世から近代にかけての日本仏教は、西洋の科学とどのように対決したのか？
- (3) 近代日本において仏教はどのように捉えられ、改革されたのか？

(1) 近世の日本仏教は国際的な影響関係（キリスト教や中国仏教など）の中でどのように思想を形成していったのか？

2014年1月15日の公益財団法人中村元東方研究所専任研究員の西村玲氏の「近世排耶論の思想史的展開——明末から井上円了へ——」において、最初に西村氏は、日本近世仏教の思想史を概観し、近世の排耶論を通して、日本近世仏教思想における中国仏教の受容の問題や、その特質と歴史的意義の一端を明らかにすることができるであろうと見通しを述べ、つづいて明末におけるキリスト教批判を概観した。そこではマテオ・リッチの仏教批判に対する反論として、インド由来の「虚空」概念と中国由来の自己内心の普遍性である「大道」という二つの概念に基づき、無始無終の完全な働きとしての「虚空の大道」が論じられた。一方、16世紀の日本では、キリスト教宣教師たちによって、仏教は死後の保証がなく、「虚無」を信仰するものであると批判されていた。この批判に対して日本の禅仏教は、民衆に五戒を授け、五戒を守る自らの正しい行いが後生の安楽と現世の安穩を招くとした。また、キリスト教の教義に対して、「虚空の大道」の立場から反批判が行われた。しかし、その後の日本の排耶論は、論理的な観点からキリスト教を批判するものとなっていった。虚空の大道という形而上学的な概念は忘れられ、虚空はたんなる近代的な空間という概念になり、この系譜の中に位置づけられる井上円了も、キリスト教に対して、神が虚空のような無意味なものであるという批判を行った。

(2) 近世から近代にかけての日本仏教は、西洋の科学とどのように対決したのか？

2014年7月9日の天理大学教授・当センター客員研究員の岡田正彦氏による「梵曆運動史の研究—19世紀の日本における仏教科学の展開—」は、「明治期における人間観と世界観」をテーマとした連続研究会の第3回として開催されたものである。

幕末から明治時代にかけて、仏教の宇宙観に合致した天文学が展開された。それは、^{ふもんえんつう}普門円通（1754-1834）を開祖とする運動であり、地球球体説や地動説に対抗し、須弥山を中心とした平面的な世界に基づくものであった。この運動は、暦を作成する「梵曆道」、占星術を行う「宿曜道」、薬などを作成する「梵医道」の三分野にわかれるような、仏教科学を展開する運動であった。梵曆運動は、開祖円通の没後、円通の理論を科学的に修正していく「同四時派」と、円通の理論を絶対視する「異四時派」に分かれた。同四時派は、自らの理論を視覚的に実証するために、須弥山儀と呼ばれる宇宙儀を盛んに作成した。この須弥山儀は、プラネタリウムのもととなった「オーラリー（orrery：太陽系儀）」に類する精密機械であり、年月日や時間、その日時の太陽と月の軌道を表示できるものであった。この須弥山儀の作成には、後に東芝を興す田中久重^{たなかひさしげ}が大きな役割を果たしていた。梵曆運動の担い手たちは、天文観測を正確に行い、暦を作り、大衆に頒布^{はんぷ}していった。梵曆の結社の活動は、明治5年に太陽暦が国の暦とされた後も、暦の配布を許可されるなど、大衆に広く普及したものであった。このように梵曆運動は、西洋の近代科学に対抗する形で始まった「反近代主義」的な運動として始まったが、天文観測を正確に行い、精密な機械や暦を生み出した科学的な、しかもそれは民衆に広く受け入れられ、広いすそ野をもつ運動でもあった。幕末から明治期にかけての西洋近代科学の流入に対して、伝統的な宇宙観に基づきながら、科学的な態度で正確な天文学が構築され、広く普及していたのである。

(3) 近代日本において仏教はどのように捉えられ、改革されたのか？

2013年12月11日の国際日本文化研究センター教授・末木文美士氏の「井上円了と日本の哲学」では、末木氏は、最初に、西周の哲学を特徴づけ、それに対比させる形で井上円了の哲学の特徴を示した。末木氏によれば、西周は必ずしも哲学を重視せず、また従来の儒学・仏教には批判的であった。そこには、日本の伝統に対する近代的

なヨーロッパの学問の優越視が見られる。一方井上円了は、日本の知的伝統に、哲学と呼ぶにふさわしい価値があることを積極的に認め、日本の伝統、特に仏教を、哲学と同じように真理を究明するものとして考えていた。このように哲学と仏教を捉えたため、円了の著作は仏教と哲学の区分が曖昧であるという問題点を抱えている。しかし円了は哲学と仏教について、領域が違うのではなく方向性が違うのであるとも述べている。末木氏はまとめとして、この方向性の違いという観点から哲学と仏教の違いを考えていくことは、今日でも有効な考え方ではないか、また、井上哲次郎と共に、日本の知的伝統が哲学としての意義を有することを強調し、細分化した宗派として仏教を捉えるのではなく、活物として仏教を捉えた井上円了の仏教論は、現代にも大いに意義があるのではないかと指摘した。

まとめと今後の展望

これまでの研究会からおぼろげながら見えてきていることをまとめるならば、以下のようになろう。

①西洋哲学の受容と、②東洋の伝統思想が西洋哲学と同等の哲学的な体系を具えたものであることの発見、③西洋哲学の概念を仏教や儒教といった伝統思想を通して理解したことなどが、独自性を有する近代日本哲学の成立の鍵となったということである。

今後の展望は以下のとおりである。当センターの活動は2015年度にひとつの区切りをむかえる。第1ユニットは、学祖井上円了の思想の解明と日本近現代哲学の独創性の探究とを二つの柱として研究を進めてきた。今までに多方面から種々の視点が提示され、研究は大きな広がりをもった。ここで一度、集約を試みる意味で三本めの柱として「明治期における人間観と世界観」というテーマを掲げ、一つのテーマを多方面から考察することを始めている。明治期の思想は、江戸期からの連続性を保持しつつも、西洋思想の受容を通して新たな展開を示した。連続性と新たな展開という二つの点に留意しつつ、様々な知の形成の基盤をなす人間観と世界観に注目することによって、明治期の思想の深層を明らかにすることを目指す。